

トゥルークの海賊3

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
設定協力

鈴木理華
大利根潮

1

偽シエンブラック海賊団は今回もトウルーク国営放送宛に堂々と犯行声明を出した。

その結果、貨物船《フロスト》が拿捕されたこと、乗員乗客三十四人が人質になったことはトウルーク全国民の知るところとなったのである。

国営放送といつてもその実パーヴァル限定放送のようなものだから、市民たちはこぞつて報道番組にかじりつき、大変なことになったと囁き合ったが、同時に訝しくも思っていた。この星が頻繁に海賊に襲われていたのは既に遠い昔の話だ。

連邦に再加入して三十年、一度も海賊がこの星を襲ったことはない。なぜ今更という怪訝な気持ちと純粹な困惑がほとんどの市民の顔に表れていたが、

それでは済まなかった人たちもいる。

言うまでもなく人質の家族と友人たちだ。

報道を見て親しい人の災難を知った人々は居ても立ってもいられず、東区の政府庁舎に押し寄せた。

トウルーク政府の対応は迅速で、政府庁舎一階に受付を設け、一室を人質家族の待機場所と定めて、情報の提供を開始した。

エルヴァリータとダレスティーヤも駆けつけたが、彼らは市役所の職員であると同時に、首相の重要な側近顧問でもある。

一般の家族とは別に、政府庁舎の職員用入口から中へ入ると、首相の秘書が緊張の面持ちで出迎えた。

「お待ちしております。こちらへ……」

二人が案内されたのは奥の会議室だった。

ここには恒星間通信装置があり、既に臨時の対策本部が設置されている。

大勢の職員が緊迫の面持ちで情報収集や連邦との対応に慌ただしく働く中、青い顔のレミンスター・

シノーク首相が二人を見つけて、急いでやってきた。こんな大事件は彼が首相になってから——もとい政治家になってから一度も経験したことがない。

日頃は落ち着いた穏やかな人柄の首相も焦燥と動揺を隠せない表情をしていたが、それには他にも理由があつたようで、喘ぐように言ってきた。

「ミズ・シノーク、ミスタ・ロムリス。残念です」

エルヴァリータはシノーク首相の従妹に当たるが、首相の口調も態度も極めて丁重なるものである。

そしてこの顔色から察するに《フロスト》の乗員乗客名簿が既に首相の元に届いており、二人の娘のエレクトラが人質になったことを知つたのだらう。

だが、人質の娘の両親は逆に首相を励ますように頷いたのだ。

「大丈夫です。レミ。娘は無事です」

「どうぞ、ご自分の務めを果たしてください」

シノーク首相は大きな安堵の息を吐き、この人は僧侶出身なので、思わず二人に合掌した。

「そのお言葉に……感謝致します」

ダレスティーヤもエルヴァリータも首を振った。

「残念ながら事態は予断を許しません」

「現在の状況はどのようになっていきますか？」

首相は慚愧に堪えない表情で言つた。

「貨物船《フロスト》は海賊船団とともについ先程

……当星系から跳躍しました」

つまりは逃げられたということだ。

エルヴァリータが確認するように問いかける。

「人質の所在は、現在はわからないのですね？」

「はい。無念ですが、危害は加えないという海賊の言葉を信じるしかありません」

ダレスティーヤも質問した。

「他の人質のご家族に、海賊の要求については？」

「話しました。民間の協力が絶対に必要ですから」

しかし、人質の家族も海賊の意外な要求を聞いて呆気に取られるばかりだったという。

「白籠岩と藍王木？ 何であんなものを？」

無理もない。どちらもトウルークではありふれた日用品に使われるもので、高価でもない品だ。偽シエンブラック団は七日後、資材と引き替えに人質を解放すると約束したという。

「ただし、資材の他にも二つほど要求してきました。一つは当星系内へ連邦軍の立ち入りを禁止すること、もう一つはパーヴァル宇宙港の封鎖です」

元トウルークの高僧夫妻は訝しげな顔になった。連邦軍を遠ざけるのはわかる。海賊として当然の要求でもあるが、もう一つが理解できない。

「何を目的とした要求なのでしょう？」

「見当もつきません。他国ならともかく、我が国の宇宙港を封鎖することに何の意味があるのか……」
首相が困惑するのも当然だった。連邦加盟国とはいえ、ほとんど鎖国しているようなトウルークで、なぜわざわざ宇宙港を封鎖させるのか……。

首相の秘書も理解に苦しむ表情で二人に説明した。「ですが、海賊はこの件に関して、かなり厳しい要

求をしてきました。宇宙船の発着を探知する探知衛星を残していく。今後、当惑星に発着する宇宙船を一隻でも確認した場合……人質の生命は保証しないというのです」

「衛星？」

元高僧の夫妻は思わず顔色を変えた。

海賊は何気なくやったのかもしれないが、それはトウルークでは恐ろしく危険だ。

二人の言わんとするところを察し、首相は苦渋の表情で頷いた。

「既に全僧院に事情を説明してお願ひしてあります。——近々に出現した星は撃たないようにと。しかし、七日後までに五百万トンの白籠岩と藍王木を揃えるためには大型の機材が必要不可欠です。我が国の機材だけでは到底、期日までにそれだけの量を揃えることはできません。採取した資材を運ぶ大型のコンテナ船にしても同様です。我が国所有の貨物船を総動員させても足りません。どちらも連邦に用意して

もらう必要があると言ったところ、機材とコンテナ船だけは例外として入国を認めると言ってきました。ですが……機材を下ろした後は、その船はそのまま宇宙港に停留せよと言うのです」

「出国は許さないということですか？」

「そのようです」

ここで夫妻の表情が厳しくなった。

「首相。執務室をお借りします」

「は？」

「急ぎます。ミスタ・クアアがまさに今この星から離陸しようとしています」

首相も顔色を変えた。

つい先程、トゥルークの長い歴史の中で例外的に彼の船が着陸したのは首相も知っている。

しかし、わざわざ十階の執務室まで行かなくても、通信装置はこの会議室にある。ここから《パラス・アテナ》に連絡すればよさそうなものだが、夫妻はそつと首を振り、忙しく働く人々を一瞥した。

(ここでは人目が多すぎる)

(人に聞かせられない話になる可能性が高い)

さりげない仕草だけで示した夫妻の懸念を首相もただちに呑み込んだ。

秘書に、しばらくここを頼むと告げて、率先して昇降機に向かった。

「——参りましょう」

ケリーが可能な限り急いで《パラス・アテナ》に戻ろうとしたのには理由がある。

偽グランド・セヴンの船は違法改造した特A級の軍用頭脳を積んでおり、ダイアナの攻略が効かない。

だが、拿捕された貨物船はそこまで高度な頭脳を積んでいない。

それならダイアナに外部操作させて、他の宙域に強制的に跳躍させてしまえばいいと思ったのだ。

無論、《パラス・アテナ》も同宙域に跳躍する。その上で通信機を封じてしまえば仲間も呼べない。

貨物船内の海賊の人数が不明なのが少々問題だが、迅速にその連中を片づけて、人質を無傷で救出する。限りなく無茶で無謀な作戦ではあるが、ケリーとジャスミンならその遂行も不可能ではない。

ケリーは車を運転しながら（恐ろしいことに自動運転機能のない車だった）ダイアナに連絡を取ってこの計画を説明したが、貨物船の所在を尋ねる前に無念そうに言われてしまった。

「残念。一足遅かったわ。トウルーク政府の通信を傍受したの。《フロスト》は先程、跳躍したわ」

小さく舌打ちを洩らしたケリーだった。

ショウ駆動機関で跳躍されたら追跡する術はない。

「二十隻の海賊船もか？」

「ええ。一緒に跳躍したわ。七日後に身代金を――

問題の資材を受け取りに来るそうよ」

車を走らせながらケリーは呟いた。

「七日後が勝負か……」

助手席のジャスミンは怖い顔で腕を組んでいたが、

低い声で物騒なことを言った。

「その時まで人質を生かしておくかな？」

「正直、五分だな。連中がシエンブラック海賊団を気取りたいんなら外道はできないはずだが……」

そう言うケリーの声にも懸念がにじみ出ている。

人質を生かしているように見せかけて身代金だけ奪い取る。

悪辣非道な手口だが、過去の誘拐事件の例からも決してないことではない。

むしろ、三十四人を生かしておく手間を考えると、殺したほうがつとり早いと考える可能性は高い。

赤い髪の女王はいやな想像を振り払うかのように豊かな髪を振って、勇ましく断言した。

「考えても仕方がない。七日後まで無事と仮定して、我々は我々にできることをしよう」

ケリーはちよつと笑って、満足そうに頷いた。

「そうだな」

ずっと以前、ジャスミンが言ったことがある。

命の掛かった局面で人を男か女かでは分けない、戦えるか戦えないかで分けると。

ケリーもそうだった。

彼は物心ついた時から軍隊にいた。歳の近い女性兵士も大勢いたが、その全員が戦える人間だった。

体力で男の兵士が勝るのは当然でも、女性兵士は男にはない発想や着眼点を持っており、彼女たちに助けられたこともずいぶんある。

少なくとも、男に頼って泣けばいい、わがままを言っても許されるのが当然という態度の女性兵士は一人もいなかった。それでは生き残れないからだ。

外の世界に出て初めて、戦えない女がいることも、戦いに向いていない男がいることも知った。

それは別にかまわない。人間にはそれぞれ適性というものがあるからだ。誰もが兵士になれるのなら、むしろ自分たちが訓練を受けた意義がない。

理解できなかつたのは——全部とは言わないが、自分は女なのだから男に守ってもらうのが当然だと

思い込んでいる女がいること、男の中にも女の手を借りるのを極端にいやがる種類の男がいることだ。

沽券こけんに関わると思うらしい。

長い軍隊生活で互いの不足を補い、助け合うのが当然という男女関係に慣れ親しんでいたケリーには、これはひどく不自然なものに見えた。自立した大人同士の関係とは思えなかつたのだ。

まるで保護者と被保護者、主人と使用人、もつと悪くすれば飼い主と愛玩動物あいがんどうぶつである。

外の世界の女たちはなぜそんなにも自分を『弱く小さく』見せたがるのか、まったくの謎だったが、後に親しくなつた女友達が苦笑しながら女性心理を解説してくれた。

「女は好きな男の前でだけはわざと弱い女を装って可愛らしく振る舞うんですよ。強い女だと男たちに敬遠されて選んでもらえないから」

これまたびつくりの理屈だった。

世の男が可愛く頼りない女を好むものだとすると、

恐らく自分の好みは一般的な男の範疇はんちゆうからかなり外れているのだろう。

苦笑を浮かべたケリーは運転を続けながら、再び腕の通信機に話しかけた。

「ダイアン。頼んだ調査はどうなってる？」

「薬の成分分析とテックスの交友関係のこと？」

「そうだ」

「薬の成分分析はまだ時間が掛かるわ。テックスの交友関係も。お友達が多い裕福な若い人って厄介やっかいね。

もう何回、進水式の映像を見たことか……」

機械の彼女に回数が把握はあくできないはずはないが、この冗談にケリーは苦笑した。

「……俺が言う筋合いじゃねえが、アドミラルにはずいぶん金持ちが多いんだな」

「まったくあなたの言う台詞せりふじゃないわよ。クーア財閥ざいばつが落とす税金だけで大いに潤うるおっている星だもの。

——もつともそれはマックスの頃からだけど」

横よこに逸れかけた話題を、ダイアナは元に戻した。

「交友関係が重なっているだけに被かぶる顔もずいぶんあるわ。全員全員の素性を突き止めるにはやはり現地に飛ぶ必要があるわよ」

「了解。もうすぐ着く」

《パラス・アテナ》は離れた時と少しも変わらず、草原にいた。その姿を見てケリーもほっとしたが、ダイアナはそれ以上だつたらしい。操縦室に戻ったケリーに、大げさなくらいの喜びと安堵を見せた。

「恋愛感情はわたしには永遠に理解できないけれど、恋人との再会ってこんな気分なのかしらね」

ジャスマンが自分の定位置につきながら茶化した。「おまえの場合は生き別れの半身だろう？」

すると、ダイアナは大真面目に頷いた。

「本当、そのとおりよ。ケリーがいないと寂さびしくて、心細くていけないわ」

手も足も出せない状況で、物騒な武器の中に取り残されたのがよほど堪こたえたらしい。

一個中隊に匹敵ひつてきする数の僧侶は現在も《パラス・

アテナ」に狙いを定めているのである。

離陸にはかなり度胸が必要な状況だが、ケリーは
 かまわず発進準備に入り、まさに飛び立とうとした
 その時、シノーク首相から緊急通信が入ったのだ。

ケリーもジャスマミンも話を聞いて驚いた。

「——出国禁止？」

「この星トゥルークでですか？」

二人の感想も首相と同じで、宇宙港の封鎖に何の
 意味があるのか甚はなはだ疑問だったが、シノーク首相は
 苦悩の表情で言ったのである。

「ミスタ・クーア。今すぐ離陸を中止してください。
 海賊たちがあなたの船に気づいたら、どんな報復に
 出るかわかりません。どうか人質の安全を最優先に
 考えていただきたい」

首相の要請は国家元首として当然のものでしたが、
 ケリーにもケリーの事情がある。

「問題の探知衛星の位置はわかりますか？」

「宇宙港と同調する軌道に一つ確認できましたが、

他にないとは言いきれません。僧院にお願いすれば

正確な数を掴つかんでいただけるでしょうが……」

それには時間が掛かる。

ケリーはちらつと手元の内線画面を見た。

そこに姿を映したダイアナが頷いてみせる。

長いつきあいだ。自信を持って肯定しているのが
 ケリーにはわかった。

探知衛星に気づかれずに発進できると確信して、
 ケリーは力強く言ったのである。

「首相。この船の離陸は連中には気づかれません。

俺はそんなへまはしません。何より、ここで七日も
 時間を潰つぶすわけにはいかないんです」

「ですが……！」

躊躇ためちいを示す首相に代わって、ダレストイーヤが
 通信に出た。

「本当に気づかれずに離陸できるのですか？」

「ええ。決してあなたの娘さんを——もちろん他の
 人質も危険に晒さらしたりはしません。約束します」

琥珀の眼に力を込めて、ケリーは通信相手を見た。

「信じてもらえますか？」

ダレスティーヤも灰色の瞳でケリーを見つめて、

静かに頷いた。

「はい」

間違つても人質にされた娘の父親が取る態度ではないが、この際はありがたい。

「あなたの言葉に嘘がないことはよくわかります。

それに、ミスタ・ラヴィーはあなたを共和宇宙一の船乗りだとおっしゃった。そのお言葉を信じます」

つい苦笑を浮かべかけたが、ケリーはすぐ表情を真面目なものに戻した。

「ミスタ・ロムリス。あらためてお尋ねしますが、五百万トンずつの白籠岩と藍王木があったら羅合は

どのくらいのをつくれますか？」

「羅合はつくれません」

即答して、ダレスティーヤはケリーが初めて聞く重要な情報を提示したのである。

「正確に言うならば、それだけではつくれません。

もう一つ欠かせない重要な材料があるからです」

ケリーは眼を見張った。ジャスミンもだ。

木と岩の他に『欠かせない材料』があるなどと、

彼らは——ダレスティーヤもエルヴァリータもアド

レイヤも今まで一言も言わなかった。

どうして黙っていたかと責めるのは意味がない。逆になぜ今になって話したのかを問うべきだが、

答えはわかり切っている。

海賊団が人質を取るといふ強硬手段に出たからだ。

「あの連中は第三の材料を持っているんですか？」

ケリーが尋ねると、ダレスティーヤは真顔で首を振った。

「あり得ません。それは自信を持って断言できます。

その材料もトールークの特産です。しかも白籠岩や藍王木と違い、一般には知られていないものです。

惑星トールークの中でも極めて限られた地域でしか採取できません」

それはどこか、第三の材料は何なのかとは二人は訊かなかつた。

訊いたところで彼には答えられないのがわかつていたからだ、ダレストイーヤはダレストイーヤでケリーの質問の意図を訝つたらしい。

「パーフェクションなる薬物が服用するものである以上、羅合ではありえないと申し上げたはずです。あなたは何を懸念しているのですか？」

「羅合ではないとしても、現実に羅合と似た効能を持つ薬が流通しているんです。あなたの言う第三の材料を持っていないにも拘わらずです」

ジャスミンが後を続けた。

「さらには二つの主要材料である藍王木と白籠岩を大量にトゥルク政府に要求してきた。この行動の理由をどうお考えですか？」

沈思したダレストイーヤだった。

考え込んだ彼に代わり、彼の妻が控えめに会話に割って入ってくる。

「もっとも合理的な解答は、海賊は羅合に使われる第三の材料の代わりになるもの——その効能を持つ何かを自力で見つけ出したということになります」

「それなのに石と木の代用品はつくれない？」

「いえ、わざわざ代用品をつくるより、あの二つはもともとの木と岩を使ったほうが早いでしょう。そのほうが安価でもあるのだと思います」

ジャスミンは頷いた。

「わたしもその意見に賛成です」

そしてこの仮説が正しければ、あの連中の目的はパーフェクションの大量製造だ。

ケリーは表情を険しくして舌打ちした。

「首相。連中の要求を素直に呑んではいけません」

苦悩の表情のシノーク首相が答えてくる。

「それはできません。拒否すれば人質が殺されま
す」

「渡すなどとは言っていません。くれぐれも用心して掛かるべきだと言っているんです。相手は海賊です。」

それも今時の。あの連中は信用できません。資材を渡しても人質が無事に解放される可能性は限りなくゼロに近いと思つたほうがいい」

吐き捨てるような口調で言つたケリーだった。

本物のシエンブラックなら——本物のグラント・セヴンだつたら信用できる。

彼らが商品（人質）を、こちらが代金（資材）を持つてゐるなら、まっとうな取引が成立するからだ。

身代金目当てで人質を取るのも立派な犯罪だが、

彼らはこの種の商売で汚い真似は決してしなかつた。

互いに利になる商品と代金を交換して、きれいに取引を終えることを好んだ。

それは彼らが信用を重んじていたからである。

ではなぜ自らに信用をつけるのかと言えば、その信用が次の取引の成功に繋がるからだ。

翻つて、あの連中が次の取引を考えているとはとても思えない。

ここまで派手な真似をした以上、取れるだけ岩と

木を取つて二度とトウルークには近づかないという安易な道を選択するような気がしてならない。

だとしたら、自らの信用など意に介さないはずで、当然、人質の命にも重きを置いていないことになる。

「木と石を手に入れるまで、連中は人質を生かしておくでしょうが、資材を受け取つたら……用済みの人質を生かして返すとは思えません」

シノーク首相は蒼白な顔で息を呑んだ。

エレクトラの両親もさすがに硬い顔だった。

一つだけ希望があるとしたら、ありふれた資材の白籠岩と藍王木は、あの連中にとって本当に価値があるものだと——是が非でも欲しがっているのだとはつきりわかつたことだ。

エルヴァリータは気丈に言つたのである。

「あなたのお話が正しいとするならば、海賊たちは資材を受け取るまで人質を生かしておくはずですよ」

ダレスティーヤも言つた。

「我々もあらゆる事態を想定して掛かりましょう。」

——あなた方はどうなさいますか？」

「連中の手がかりを探します」

通信を切り、今度こそ離陸しようとしたケリーにダイアナが言ってきた。

「二分待つて。上空に探知衛星が接近中よ」

じりじりしながら、偽集団のありがたくない置き土産が通り過ぎるのを待つたが、そうしたら、また次の軌道から衛星が迫ってきた。それが通過すると、また次といった具合できりがない。

ジャスマンが呆れて言った。

「何が何でも宇宙船を飛ばせたくないらしいな」

ケリーは探知衛星の高度と探知範囲を確認すると、面倒くさそうに操縦に取りかかった。

「——成層圏を抜けた直後に跳躍するぞ。それなら衛星はこつちを探知できないはずだ」

「理屈ではそうでしょうけどね……」

画面の中のダイアナが苦笑して肩をすくめている。

そこは普通、宇宙空間とは言わない。

そんなところで跳躍するなど非常識の極みだが、ケリーにとつてはいつものことだ。

ダイアナはむしろ楽しそうに、自らの推進機関を作動させて草原から飛び立ったのである。

一階に下りたダレスティヤとエルヴァリータは政府庁舎の表の部分へ出ようとした。

この政府庁舎の一階は、一般人にも入れる区域と関係者以外立ち入り禁止区域に分かれている。

業者専用の裏口も立ち入り禁止区域内にある。

二人がその前を通りかかった時、急に入口が開き、ものすごい勢いで入ってきた人が勢い余って二人と正面から出くわす格好になった。

身体の大きな、木訥な感じの青年だった。

よほど慌てて来たのか、息を切らし、激しく肩を上下させている。何か心を乱すことがあったようで、厳つい顔と大きな体軀から憤りが噴き出している。

誰もいないと思つて裏口の扉から飛び込んだら、

静かに自分を見つめる二人とまともに出くわして、青年は慌てて怒りを引つ込めた。

さらには、スーツを着ているのに刺青の刻まれた二人の顔を見て大きな驚きに眼を見張り、ただちに姿勢を正し、真顔になって挨拶してきた。

「エレクトラのご両親ですね。初めまして。ジークムント・カイネンです。エクルンドの友人です」

「わたしたちのことをご存じでしたか？」

「はい。エクルンドから聞きました。お二人は……還俗したゴオランとゴラーナだと」

本来そんなものはいるはずがないのだが、二人は例外である。初対面にも拘わらず、ジークムントは高僧に対する全トゥルーク人の敬意を露わにして、真剣な表情で尋ねた。

「エレクトラは……無事ですか？」

二人は言下に答えたのである。

「無事です」

「今のところは」

落ち着き払った口調だった。

娘を人質にされている両親の台詞とは思えないが、ジークムントは大きな息を吐いて胸を撫で下ろし、すぐに真摯な態度に立ち返って申し出た。

「よくに何かできることがあれば言ってください。

——エレを助けるためなら何でもします」

夫妻は丁重に礼を言った。

「ありがとうございます。カイネンさん」

「お気持ちは嬉しく思います。ですが、我々は人質全員を助けなくてはならないのです」

ジークムントははつとなった。

次に羞恥に赤くなつてうなだれた。

「すみません。つい……」

人質になつたのはエレクトラだけではない。

不安な家族が他にも大勢いるのに彼女のことしか考えなかつた自分を恥ずかしいと思つている。その彼の気持ちは充分に二人に伝わつた。

「娘を心配してくださいありがとうございます」

「専用裏口から入っていらした方が、あなたはここで働いている方ですか？」

「いいえ。仕事の関係で……前に一度ここに納品に来たことがあって、この裏口を知っていたんです」

政府庁舎のある東区は基本的に政府関係者以外、立ち入り禁止だ。

今回は人質の身内に限って通行が認められたが、この『立ち入り禁止』はさほど厳密なものではない。

現にジークムントは『人質の友人』というだけで通過を許されている（もつとも、後で聞いたところ、彼は検問所で相当粘^{ねば}ったようではあるが）。

その人質家族の様子を見に行こうとしたところで、ダレスティヤとエルヴァリータは困ってしまった。

東区の人たちは二人の存在を知っている。慣れてもいるのであまり驚かないが、今この政府庁舎には他の地区からも大勢の人がやってきている。

「迂闊^{うかつ}にこの顔は出せませんね」

「ええ。好ましくない騒ぎになります。——これを

使わせてもらいましよう」

エルヴァリータが取り出したのはジャスミンからもらった化粧品だった。

濃い茶と象牙色^{アイボリー}の二色を混ぜ合わせ、自分の肌の色に調整して塗るというものだ。ダレスティヤとエルヴァリータでは肌の色が多少違うが、これならどちらにも対応できる。二人は鏡を見ながら肌色に合わせて化粧品を塗っていったが、鏡の中の顔からみるみる刺青が消えていくのを見て、思わず驚きの声を発した。

「これは見事な……」

「さすがはクォーア製品です」

刺青がすっかり隠れているのに、肌の質感は実に自然で、とても厚い化粧を施したようには見えない。

二人の支度^{したぐ}を待っていたジークムントも驚いて、眼を瞬^{まばた}いたくらいである。

三人が人質家族の待機する会議室に行ってみると、そこは大勢の人の悲嘆と混乱に満ちていた。

老人もいる。女性も、小さな子どもの姿もある。

あちこちですすり泣きと悲嘆の声が聞こえる。

そこには二人の息子のエクルンドもいた。

「父さん！ 母さん！」

両親に気づいたエクルンドは急いでやってきたが、刺青のない二人の顔を見て眼を丸くした。

「……どうしたの、その顔？」

「お化粧です」

ちよつと絶句しながら、エクルンドは短く尋ねた。

「エレは？」

「無事だ」

「今のところは」

エクルンドもジークムントと同じように、大きな安堵の息を吐いた。

これが他の息子だったら『想像で言うなよ』とか『どうしてわかるんだよ』と言ったかもしれないが、両親が無事だというなら妹は無事なのだ。

エルヴァリータが大勢の人々を見渡して尋ねる。

「この中にエレの婚約者は来ていますか？」

答えたのはジークムントだった。

「……彼は来ません」

エクルンドが顔色を変えた。

「なぜだ？ 妹が心配じゃないのか？」

「俺もそう言っただが……仕事中だからと」

唸るような口調で大きな身体を震わせている。

怒りを堪えかねているようだ。

ダレスティーヤが穏やかに言った。

「わたしどもはまだその方のお名前も年齢も、何のお仕事をされているかも知らないのだが……」

再びジークムントが答えた。

「名前は……キース・ドンナー。二十八歳。西区でカフェの店長をしています」

ジークムントの口調も表情も不快そうだったが、敢えてキースを誹謗するようなことは口にしない。ダレスティーヤは寛大に頷いた。

「営業中ならお客さまを放り出しては来られまい」

「ええ。致し方ありません」

エルヴァリータの口調もあっさりしたものだ。

エクランドがジークムントの相手を引き受けて、

両親から距離を取った。

憤懣ふんまんやるかたないジークムントを、エクランドが

しきりとなだめているようだった。

薄情なキースに憤るジークムントの様子を見れば、

彼がエレクトラに抱く感情がどんなものであるかは

一目瞭然りようぜんである。

娘を恋い慕したう若者をエルヴァリータは微笑ほほえましく

見つめ、一転して声を低めて夫に話しかけた。

「ダール」

「はい」

「あの子は非常な恐怖を感じているようですね」

「わたしもそれが気になります」

ダレスティーヤは妻に対しても敬語で答える。

二人にはいつものことだが、これがエレクトラの

眼には『うちの両親は他人行儀きようぎで、ちつとも夫婦

の愛情が感じられない』と映るらしい。

そしてこの『あの子』が、エクランドでもジーク

ムントでもなくエレクトラを指したものであるのは、

二人の間では確認する必要もない。

ダレスティーヤは少し眉まゆを顰ひそめ、独り言ひとりごとのように

言ったものだ。

「人質にされたのだから恐怖を感じるのは当然だが、

それにしても……」

「ええ。いささか度が過ぎるようです」

真顔で言ったエルヴァリータが唇くちびるに微笑を浮か

べ、それを見たダレスティーヤが問いかけた。

「どうしました?」

「いえ、少し不謹慎ふきんしんなことを考えました」

「どんなことを?」

「ミスタ・ラヴィーのことです。今この時に、この

トゥルークにあの方がいらっしやる」

長身のダレスティーヤが思わず妻を見下ろした。

エルヴァリータは微笑したまま夫を見上げた。

「不思議と心強く思います。それと同時に、これら大なる闇のお導きかと感じました」

ダレスティーヤも微笑して頷いた。

「確かに不謹慎ですが……同意見です」

パーヴァル宇宙港の封鎖を聞いて眼を剝いたのが、ヴィルジニエ僧院に来ていたリイとシエラだ。

「最低でも一週間、宇宙港が封鎖!!」

金と銀の天使たちは愕然として顔を見合わせた。

「……ケリーは後で迎えに来るって言ったけど」

「……一週間、後なんでしょうか?」

「いやいや! ダイアナなら下りられるだろう!」

「それはわたしもそう思いますけど……!」

ルウがのんびりと口を挟んでくる。

「一週間後だと思ったほうがいいよ。どう考えても人質解放が優先だ。キングは海賊をやっつけてから、ぼくたちを迎えに来るつもりなんじゃないかな」

二人は呆然と立ちつくした。

それではリイとシエラは一週間も学校を無断欠席することになる。真面目で勤勉な生徒として絶対に避けなくてはならない事態である。

何よりまずいのは、自分たちは惑星トウルークに来ることを学校に告げていない。

週末の旅行先はリイの実家と言っている。

月曜になって二人が姿を見せなければ、学校からベルトランのリイの実家に連絡が行き、自分たちの行方不明が発覚してしまう。

とんでもない騒ぎになるのは必至である。

リイは鬼気迫る表情で友人に尋ねた。

「——恒星間通信施設は?」

ライジャは申し訳なさそうに首を振った。

「僧院にはない。街まで出なくては」

「連れて行ってくれ」

アルヴィン大師が急いで車を手配するよう、僧侶見習いに指示を出し、ルウは他人事のように言った。「それじゃあ、ライジャ。サフノスク大学に伝言を

頼めるかな。ぼくは一週間ほど休みますって」

留守番を決め込むつもりのようなのだが、ライジャは何とも言えない顔で再び首を振った。

「口幅はばつたいことを言うようだが、休講届けならばご自分で言わなくてはいけないと思う」

至極しごくもつともな正論だが、ルウはため息を吐いた。

ちよつと油断すると、彼の黒髪は勝手に動き出す始末なのだ。こんな有様を一般人に見られたら何を言われるかわかったものではない。

「いっそ、ばつさり丸坊主にしちゃうか……」

恐ろしい眩くらきに大師たちの顔から血の気が引く。

大いなる闇が自らを損こなうように感じたのだろう。蒼白そうはくになった彼らが跪ひざまずいて懇願こんがんする前に、ルウがあつさり言った。

「やめとけよ。こんな影響を受けやすい場所ですの髪を切るのは昆虫が触角をなくすようなもんだぞ」

ルウはますます苦い顔になった。

「……たとえばものがものすごく間違つてる気がするけど、

言いたいことはわかる」

シエラが僧侶たちに手を合わせて頼み込んだ。

「この人の髪を隠せるものなら何でも結構ですので、何か貸していただけませんかでしょうか」

否いなやがあるうはずもない。僧侶たちは大慌おどろてで僧院の奥に走り、大きな白い練絹ねりまぬを持って戻ってきた。テーブルクロスのような大ききさで、聞けば祭壇さいだんに敷かれていた布だという。

ルウは練絹を手にならんと考えた。

「大事なものとみただけ……頭に巻まいちゃってもいいのかな？」

ルウが笑って言う。

「いいんじゃないか。却かえつて、御利益ごりやくがついたって喜ばれる気がする」

「……うへえ」

ルウは辟易へきえきした様子だったが、何もしないよりはましである。練絹を頭に巻きつけて勝手に動き出す髪を押さえ込んだ。後は運を天に任せ、街中で勘

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。